

造技術の復元的研究をつづけています。その成果をもとに、2月23・24日の両日、上記の研究集会を当調査部講堂で開催しました。

この会は、各地で鑄銭遺跡の調査に携わる考古学研究者や、文献史学、鑄造技術の研究者が一堂に会して、古代から中世、そして近世の鑄銭技術（お金づくりの鑄造技術）を比較検討し、技術的な系譜を明らかにしようとするものです。

これらの研究成果を受けて、当調査部では、富本銭の鑄造実験に着手しました。できあがったばかりの古代の富本銭が、どのような色で光り輝いていたのか、それがもうすぐ解明されようとしています。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）

遺跡 GIS 研究会

埋蔵文化財センター文化財情報研究室では、2001年11月16日に、6回目となる遺跡 GIS 研究会を「測量計測技術と遺跡 GIS」のテーマのもと開催しました。この会では、GIS（地理情報システム）の考古学分野での応用を研究しています。研究発表のほか、機器やソフトの展示もおこない盛会でした。

研究発表は、国際日本文化研究センターの森洋久氏が「GLOBALBASE：中心をもたない歴史地理情報システム」、国際航業の本郷賢児氏が「レーザスキャナによる文化財の計測」、倉敷紡績株式会社の桜井靖久氏が「市販デジタルカメラによる写真計測システムについて」、京都市埋蔵文化財研究所の宮原健吾氏が「オルソ画像と遺跡調査への応用」、奈良大学の泉拓良氏が「レバノンでの GIS 考古学の実践」の題でそれぞれおこないました。

簡便でありながら精度の高い各種システムの開発が進んでいることがよくわかり、文化財関連分野での応用例もより高度なものが見られるようになりました。

（埋蔵文化財センター）

『法隆寺古絵図集』『法隆寺考古資料』

『法隆寺の至寶』の一環として編集を開始しながら、諸般の事情により刊行に至らなかったものが、当研究所の史料として公刊されつつあります。昨年11月には、法隆寺にさまざまな経緯で伝来した中世から近代の指図・絵図269点を図版で紹介する『法隆寺古絵図集』が刊行されました。続いて今年3月に



「法隆寺考古資料」より抜粋 飛鳥～江戸時代の食器

は、法隆寺に残る土器、木器、金属器等の考古資料を発掘品、保管品を含めて掲載、解説した『法隆寺考古資料』が刊行されます。『法隆寺古絵図集』は平城宮跡発掘調査部史料調査室が編集にあたりました。また、『法隆寺考古資料』は、平城宮跡発掘調査部考古第一調査室と第二調査室が整理をすすめ、後者が編集を担当しました。編集・刊行にあたっては、法隆寺に多大のご協力をいただきましたことに謝意を表します。

（平城宮跡発掘調査部）

研究室紹介

遺跡研究室（文化遺産研究部）

奈文研に研究所発足当初からあった建造物、歴史の2研究室に加え2001年4月に新設されたのが遺跡研究室です。これらの3研究室をあわせて文化遺産研究部が組織されたわけです。

遺跡研究室の仕事は遺跡の整備に関する調査研究と、庭園史に関する調査研究の2本柱からなっています。これらの調査研究はこれまでも奈文研の調査研究の一つとして、古くは建造物研究室、その後は平城宮跡発掘調査部計測修景調査室を中心として取り組んできたテーマです。ときに庭園が建造物研究室の主たる研究テーマとなった時期もありましたが、建造物研究室、計測修景調査室ともに本務は別のと



大湯環状列石（秋田県鹿角市）の整備状況

ころにあり、遺跡整備や庭園は副業としておこなわれてきた感がありました。今回、それが晴れて独立したわけです。独立行政法人ですから独立することに意義あり、なのであります？

さて、遺跡整備に関する調査研究ですが、まずわが国でおこなわれている遺跡整備の実態を把握する必要があります。「大規模遺跡の整備、管理、活用に関する調査研究」がそれです。日本の遺跡整備は世界的に見ると、特異な手法をとっており、これが諸外国はもとより日本国内においても正しく理解されていないのではないかと懸念されます。つまり、日本では発掘された遺構は保存のためにいったん埋め戻し、その直上に新しい材料で地下に埋まっている遺構を表現する、という手法が主流です。しかし、欧米をはじめ世界の常識は、遺跡では遺構そのものを見せるのがあたりまえです。石や煉瓦からなる遺跡と日本のように木造建物が朽ち果て、土に掘られた柱穴のみが残る遺跡とでは当然その取り扱いが異なるのですが、その事情はなかなか正しく理解されていません。

かっことく言えば遺跡研究室では日本の遺跡がいかにあるべきか、理念や技術、手法を含めて調査研究し、国内をはじめ、諸外国にも発信していきたいと思っています。

庭園に関する調査研究では現存庭園も研究対象としますが、当面は発掘された庭園遺構に関する情報収集、分析検討に軸足を置いた研究を進める予定です。また日本庭園のルーツを究めるために、古代庭園に関する調査研究もテーマの一つとします。

新設の研究室であり、部屋も狭く、予算も乏しい現状ですが、とにかく研究の実績をあげて世の中に認められるよう頑張るしかない、と室員一同（2名ですが）燃えています。

考古第三調査室（平城宮跡発掘調査部）

奈良文化財研究所による発掘調査は、宮殿や寺院を対象とすることが多いので、出土遺物としては圧倒的に瓦が多くなります。そのため研究所の発足当初から、瓦の研究は、重要な仕事として位置づけられてきました。その中で、今の考古第三調査室は、瓦を研究する専門の部屋として1970年に誕生しました。現在、考古第三調査室には4人の研究員が所属しています。それ以外にも出土した瓦の洗浄や復



瓦の拓本づくり

元をおこなう整理作業員の方が6名、遺物の実測やデータベースの作成などをおこなう派遣職員の方が4名いて、調査研究活動をサポートしていただいています。

つぎに考古第三調査室の仕事の内容について紹介します。当調査室では、研究所発足以来の仕事を引き継ぎ、軒を飾る瓦の文様を分類し、同一系統の文様に同一の番号をつけ、文様の範（木型）ごとにA・B・Cなどのアルファベットをつけ記号化するなど、常に先進的な試みをおこなってきました。その結果、現在までに確認している奈良時代の範の種類はおおよそ650種類にも達します。そしてその成果にもとづき、奈良時代の瓦の年代細分などを中心に研究を進めています。今後は、範傷の進行や彫り直しなどを、すべての種類の範で詳しく調べ、より細かなタイム・スケールを作ることが課題となっています。

1990年以前は軒瓦の研究が中心でしたが、現在では軒瓦以外の丸瓦や平瓦についても、出土数のカウントや重量の計測もおこない、より総合的な瓦研究のための基礎資料の作成もおこなっています。このほか遺跡出土軒瓦のデータベース化も1980年代前半から進めており、現在の登録資料は7万点を超えます。そのうち約5万件の資料については画像のデータ化も終了し、今後、ホームページを通して一般の方にも公開していく予定です。

編集 「奈文研ニュース」編集委員会
発行 奈良文化財研究所